

秋風の吹くたびごとにあなめあなめ小野とはなくて薄^{すすき}おひけり

小野小町

六歌仙にただひとり選ばれた女性、小野小町。しかし彼女の詳しい系譜はほとんどわかっていない。絶世の美女であることや、業平とともに色好みとして名を馳せたこと、晩年を乞食となつて流浪したことなど、数々の伝説が語られる。生没年も出自も定かではなく、彼女が残した歌で確かなのは『古今集』の十八首のみ。掲出歌は『小町集』収載の作だが、真作ではなく後人が増補したものである。というのも彼女はこの歌のなかでなんと髑髏になつてしまつているのだ。

「秋風がつれなく吹くたびに、ああ目が痛い、ああ目が痛い。ここは陸奥^{みちのく}で、小町の住む小野というわけではありませぬのに、私の目からなんと薄が生えてしまつているのです」。陸奥は小町が晩年に流浪して死んだという説話の地。詞書によると、逢わずに別れていった男が道中思いも



かけない所で声が聞こえたので、こわごわ近寄つて聞いてみると、この歌を詠じているのだつた。不思議に思つて草の中を見ると、小野小町の薄が心惹かれる風情で男を招いて立っていたという。『古今集』に「秋の野の草の袂か花すすき穂にいでて招く袖と見ゆらむ」という在原棟梁^{むねやな}の作がある。薄の穂を女が草の中から招く袖とする見立てはここに見ることができる。また『日本霊異記^{りよういき}』に髑髏の目の中に竹の子が生えているのを抜いて助ける話があり、その呻き声を「痛^{あな}、目」と表している。このことから別々の伝承やイメージが組み合わされてこの一首ができていくことがわかる。さらには一首を小町の歌とするもの、業平の東下りと結び付けて髑髏の小町と業平との連歌とするものがあるという。

いつの世も秘するものはみながおもしろく暴こうとする。「花の色はうつりにけりな…」と詠った彼女のうつくしくかなしいあわれの心を思うとき、「あなめあなめ」の響きは説話とはまた異なつた印象を持つて耳に聞こえてくるような気がする。

(小島なお)